

AD ALTIORA SEMPER

神戸市外国語大学学術情報センターだより 第48号

背骨に明かりを灯すための、私だけの部屋

津守 陽

在外直前という時期にこのエッセイの依頼をいただいた時は、正直困ってしまった。図書館に籠り切るといふ幸せな時間を、気づけばここ何年も持たずに来てしまったから、何も書けるネタなんて無いではないか、と思ったのである。だがこの「籠れない」状況があるからこそ、その貴重さをあらためて見つめる機会が先日あった、と言えなくもない。そんな当たり前の気づきについて、少し綴ってみたいと思う。

今年のGWはふと思いついて、香港中文大学へ資料調査出張に出かけた。香港中文大学は九龍半島北側の丘陵地帯に開かれた広大なキャンパスを誇る。各建物間の勾配が激しいため、学生は学内循環バスで移動しており、来客も（黙って）利用することができるので、出張中は毎日このバスにお世話になった。バス道のきついヘアピンカーブからは時に美しい海辺を望むことができる。

資料調査のお目当ては、香港の新聞『星島日報』の日中戦争期マイクロ資料と、同じく戦時中に中国西南部各地で発行されていた文芸雑誌であった。私が専門とする近代中国文学では、従来北京と上海の二大都市が研究の中心となってきたが、近年は周辺地域が注目を集めている。特に日中戦争期は沿岸の主要都市が日本軍に占領されたことで、桂林や昆明などのかつて僻地であった地域も、疎開してきた臨時大学や出版社を擁する、文化中心へと急遽変貌したのである。

この戦時下西南中国における知識人たちの文芸が興味深いのは、そこに驚くほど多様で成熟した

知識活動の一つの頂点が見いだせるからである。当時大学人たちは資料どころか妻子すら帯同することもかなわずに、気の遠くなるような道のりを越えて中国の辺境へと逃げた。疎開先でも爆撃機がひっきりなしに飛んで来るから、空襲警報のたびに筆を放り出して走り出さねばならない。そんな劣悪な状況下にありながら、彼らは静かな思索の天地を保つことを自らの拠り所とし、戦争や文明について内省の筆を走らせた。極限下で人間存在の意味を問い直すようなテーマに向き合った作品群はそれだけでも魅力的だが、同時に日本の一研究者として、その同時代に日本では何が起こっていたのかを、常に突きつけられる。

だが厄介なことに、この時期と地域の出版物は、粗悪な紙質ゆえの破損や流通量の少なさから極めて手に入りにくい。現在中国の国家図書館や各高等教育機関が、ものすごい勢いで戦前



中文大学「大学図書館」
正面入り口から後方の山を望む

の資料をデジタルアーカイブ化しつつあるとはいえ、部数の少ない雑誌はまだ対象となっていないことが多く、目録や OPAC だけでは所蔵状況がよくわからないことも多い。そんな訳で、後から述べる理由で長期出張を望むべくもない私としては、資料入手をほぼ諦めていた。

ところが昨年香港の学会出張がきっかけで、この種の資料保管地としての香港の価値を遅まきながら認識したのである。その日私はいつも通り(!) ギリギリまで会議資料が完成せずに、ホテルで必死に PC を叩いていたが、『星島日報』文芸欄の記事を資料に取り込もうと香港の電子資料庫サイトを立ち上げた。しかしよりによって、見たい記事の周辺一ヶ月分だけがぼっかりと電子化されていない。焦った私は香港中文大学が『星島日報』のマイクロ資料を持っていることに気づき、会議主催者である友人を通じて、翌日の閲覧を申し込んだ。そして順調に発表前日(!!)に当該記事を撮影し、発表資料を完成させられたのであった。こんなスピーディな資料利用と、マイクロからのスムーズな PDF 化を可能にしてくれた、香港中文大学の対応と優れた設備には感謝の言葉しかない。この時同時に、戦時下の西南地区刊行物の所蔵について、香港中文大学では大陸のどの大学よりも手応えのある検索結果を得られることに気づいた。いつかこれらの資料を入手したいと



中文大学「大学図書館」の館内。
広々として設備が整っている

マイクロ資料は中文大学4カレッジのひとつ、 聯合書院にある



思い、それがようやく叶ったのが今年のGWだったのである。

香港なんて近場、いつでも行けるのではないかと思われるかもしれない。だが恥ずかしながら、私が資料調査のために海外出張したこと自体、7年ぶりのことであった。そこには多分に私自身の怠惰も関係していたとはいえ、遠距離婚でワンオペ育児状態の私にとって、海外出張自体「贅沢」な機会だと感じていたことが最大の理由であった。先方からの依頼も含む学会出張がどうしても優先され、そのために実家に頭を下げ泊まりがけで二人の子供を預けると、もうなんとなくその年の杵は「使い切った」感があって、それ以上資料調査の機会を追加することに二の足を踏んでしまう。だが今回は、在外先からでは距離的にいっそう香港へ行きにくくなることを考え、東京の義実家に子供達を預けて東京から香港へ行くという新案を思いつき、気が変わらないうちにと敢行したのであった。

一週間の香港は実に楽しい滞在となった。北京大学時代の同窓生がいることもあり、日中の図書館の資料撮影で目が疲れ切ったあとは、一緒に地元の祭りを見物したり、今後の研究協力の可能性をオールド香港の雰囲気を残すカフェで話し合ったりと、充実した時間を過ごすこと

ができた。資料の収穫も希望通りで、当該時期の『星島日報』をざっと見られただけでなく、スペシャルコレクション室では、戦時下の桂林で出版された詩雑誌を閲覧・撮影することができた。

だが研究上の収穫はさておき、ほの暗い明かりのもとで、今にもくずれそうな、向こう側が透けて見える薄いページを慎重に繰り、かすれた活字で印刷された詩論に目を凝らすことを繰り返しているうちに、ふとある感慨が心に芽生えた。それはこうした図書館での時間が、私が「ひとり」になれる一見「贅沢」な時間であると同時に、時空を超えて「誰か」とつながり、独立した「私」を保つためのかけがえのない時間でもある、という気づきだった。もちろん、仕事と育児の合間を縫って研究を進める身としては、現地に飛ばずとも数々の資料が見られる、文献の電子化とインターネット公開の流れは涙が出るほどありがたい。それでも、他人の手で切り出された文芸欄だけの電子ファイルではなく、戦時下の新聞が紙面そのまままで読める膨大なマイクロを繰り、ボロボロの薄い文芸雑誌をめくることではじめて、文献の向こう側にいる、疎開先の暗い明かりで思索を馳せていたはずの書き手たちと、かすかな対話を始める可能性が開けるのかもしれない、と身にしみて感じたのである。

名エッセイ「私だけの部屋」でヴァージニア・ウルフが、女性が芸術家となるには年収500ポンドと鍵のかかる部屋が必要だと言った言葉は、通常は女性にとっての経済的・精神的独立の必要性を訴えたと理解されている。魯迅が中国のノラたちを諷めた言葉も、同じ趣旨で捉えられている



特蔵閲覧室（スペシャルコレクション室）にて

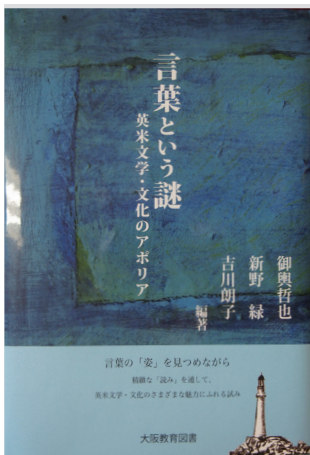
だろう。けれども、鍵のかかる部屋なんてとうに獲得した現代人も、「私だけの部屋」を失う危険性はいつでも持っている。エッセイの中のウルフが古今の書き手たちと対話することで自由な思索を繰り広げていったように、私の研究する近代中国の作家沈從文（しんじゅうぶん）が昆明の暗いランプを見つめながら生命の意味を考えたように、本当にひとりになれる空間は、世界と静かに向き合うことのできる場所にこそ出現できる。私にとってそれは、図書館だ。古い紙の匂いに包まれながら、新しい対話の訪れによって私の「背骨を半分ほど降りたあたり」に「明るい光」を灯すことのできる、必要不可欠の場所だ。もしかしたらこの体験がいつも既視感を引き起こすがゆえに、それがどれほど初めての土地であろうと、図書館の椅子に腰を下ろした瞬間、言いようのないなつかしさを覚えるのだろうか。

（つもり あき 中国学科准教授）



Festschrift を作り上げる楽しみ

新野 緑



言葉という謎
——英米文学・文化の
アポリア
御輿哲也、新野緑、
吉川朗子（編著）
大阪教育図書
2017年3月発行
図書館所蔵
N930.4-141

本を「作る」のは、単著であっても共著であっても、心躍る楽しい作業です。私がはじめて本作りに携わったのは、恩師の古稀をお祝いする Festschrift、つまり記念論文集でした。昨年春刊行した『言葉という謎』もまた、本学の英米学科教授であられた御輿哲也先生のご定年をお祝いする Festschrift です。もっとも、先生のご友人や同僚、教え子が、それぞれの研究成果を自由に披露してそのご功績に敬意を表す一般的な Festschrift とは異なり、先生のご研究に関わるテーマを設定することで記念論文集の意義はそのままに、独立した研究書として読んで頂いても面白い、まとまりのある一冊にしたいと考えました。英米学科の吉川朗子先生にも世話人を引き受けていただき、御輿先生には編者に加わっていただく形で、記念論文集の企画がスタートしました。

Festschrift を編む楽しみは、何よりも、多様な興味や研究方法を持つ執筆者との学問的、人間的交流にあります。本書の場合、寄稿者の多くは外大の教員、あるいは元教員と卒業生で、以前から見知った間柄ではありますが、それでも一緒に論文集を作る中で、同じ外大に関わる者として、御輿先生に対する敬意を根本として新たな絆を確認できたように思います。しかも、た

とえば「引退へのいざない」という、ご定年をお祝いする論文集にぴったり相応するラーキン論を寄稿して下さった高橋和久先生をはじめ、奥村沙矢香先生、森田由利子先生、長柄裕美先生、廣野由美子先生など、御輿先生のご友人の先生方もそれぞれがご専門を通して「言葉の謎」に迫る力作を寄せて下さり、交流の幅も学問的な広がりも、格段に大きくなったと感謝しています。

期日を守って次々と送られてくるご論文を読み、構成を考える編集作業は本当に楽しく、とりわけいくつかの論文をグループに分けてセクションタイトルを決める作業では、個々の作品間の思いがけないテーマの重なりや、異なる視点の交錯などに強い学問的刺激を受けました。

内容のみならず、カバーや帯、表紙、扉、見返しなどの装丁もまた、本作りの楽しみの一つです。知り合いのデザイナー辻村紀子氏に、「御輿先生のご専門のヴァージニア・ウルフを遥かに想わせるデザインを」とお願いしたところ、高名なイラストレーターのご主人の絵をカバーに、青を基調にした素晴らしい本に仕上げてくださいました。出版を快く引き受けて便宜を図って下さった大阪教育図書の横山哲彌社長に「こうした論文集には珍しく本が完売した」と喜んでいただきましたが、それについては、内容はもちろん、装丁の美しさも大きく影響したように思います。

神戸市外大でご定年を迎えられる先生の記念論文集が献呈されるのは、おそらく御輿先生が初めてで、文学研究に対する先生の熱意と、人の和を大切にされる毅然として真摯、かつ暖かいお人柄の賜物でしょう。本書は、御輿先生の作られる人と学問のネットワークに加わる喜びを、しみじみと感じる一冊となりました。

(にいの みどり 英米学科教授)

映画、ときどきスペイン

昨年の夏から交換教員としてスペインのアルカラ大学に在籍し、今年の3月、半年ぶりに日本に帰ってきた。ちょうどそのころ日本では、ピクサーの長編映画 19 作目となる『リメンバー・ミー』（原題：「Coco」）が公開されていた。今年3月に発表された第90回アカデミー賞で、長編アニメーション賞と主題歌賞の2部門を受賞した話題作である。映画の舞台はメキシコ。1年に1度、亡くなった者の魂が現世に帰ってくるといわれる“死者の日”いわばメキシコ版“お盆”が作品のテーマとなっている。私が個人的に最関しているメキシコ人俳優ガエル・ガルシア・ベルナルが、登場人物の声を担当していると知り、スペインで公開された直後に映画館へ足を運んだ。エンドロールが流れたとき、私は必死で涙をぬぐっていた。そこに描かれていたのはメキシコを含むラテンアメリカにおける家族関係のリアルである。愛情の深さゆえ、とにかく過保護な祖母。子の将来を想い、主人公ミゲルに夢をあきらめさせようとする両親。それはシンデレラや白雪姫の継母たちが、自らの利益のために主人公たちを苦しめているのとはわけが違う。ミゲルの家族には悪気がない。そこには生々しい家族の姿が映し出されていたのだ。日本とラテンアメリカでは家族の形が大きく違っている。わたしたち日本人にとっては少し大げさに感じられたり、過保護にみえたりするかもしれない。しかしどんな形であれ、どこの国であれ、そこには家族の絆や愛情が存在している。『リメンバー・ミー』を観に行った夜、わたしは日本にいる家族に電話をかけていた。

時を同じくして、ギレルモ・デル・トロが監督を務めた『シェイプ・オブ・ウォーター』（原題：「The Shape of Water」）が第90回アカデミー賞で作品賞など4部門を受賞し、第75回ゴールデングローブ賞でも2部門を受賞した。実はこのギレルモ・デル・トロ監督の出身もメキシコである。2006年のメキシコ・スペイン・アメリカ合作映

画『パンズ・ラビリンズ』（原題：El laberinto del fauno）も同監督の作品である。『シェイプ・オブ・ウォーター』も、『リメンバー・ミー』同様、アカデミー賞受賞以前から話題になっていたのだが、帰国準備でなかなか時間がとれず、日本に帰国する飛行機の中でやっと観ることができた。声を出せない女性とアマゾンの奥地から連れてこられた不思議な生き物の恋の物語。オープニングから、観客をも水の中へ引き込んでしまうかのような映像の美しさに息をのむ。まるで誰かに絵本を読んでもらいながら、眠りにおちてゆくような心地よい感覚であった。

昔から読書や映画鑑賞は好きだったのだが、スペイン語圏の映画を細かくチェックするようになったのは、外大図書館のラーニングアドバイザーとして、スペイン・ラテンアメリカのおすすめ映画に関する記事の連載を始めたのがきっかけである。図書館にあるAV資料をできるだけたくさんの学生に利用してもらうため、自身の提案でスタートした連載なのだが、紹介した映画が利用中になっていたり、後輩から「先輩のおすすめ映画観ましたよ。」と報告が届いたりする度に、心の中で密かにガッツポーズをしたりする。さて、次はどの映画を紹介しようか、と考えながら今日も映画を観ている。

（外国語学研究科博士課程 / ラーニングアドバイザー）



電子書籍サービス「Maruzen eBook Library」を導入しました

橋本 真里

2018年4月から、電子書籍サービス「Maruzen eBook Library」を導入しました。現在「地球の歩き方」82タイトルと「MACMILLAN READERS」123タイトルを利用できます。必要な箇所をPDFファイルで保存したり、印刷することも可能です。*1 図書館のほか、学生コンピュータ室、個人研究室などで、学内LANに接続しているコンピュータから利用できます。

おすすめは学外から利用できるリモートアクセスです。自宅のパソコンやタブレット、スマートフォンから使えるようになります。利用にはアカウントを作成する必要があります。

【リモートアクセスアカウントの作り方】*2

- 1) 学内で Maruzen eBook Library (<https://elib.maruzen.co.jp>) にアクセスします。
大学名の横にある「アカウント」ボタンをクリックします。



- 2) 学内LANで使用するメールアドレス（認証IDとして使用）と氏名を入力します。利用規約を読んだ上で「利用規約に同意して次へ」ボタンをクリックします。



- 3) 確認メールが届きます。メール中に表示されたURLから認証パスワードを登録して、アカウント作成完了です。

リモートアクセスアカウントの有効期限は90日間です。

上記 Maruzen eBook Library サイト内「アカウント」から期限延長の手続きができます。

■ MACMILLAN READERS

マクミランランゲージハウスから出版されている多読用リーダーのシリーズです。冊子では所蔵していない一番やさしいグレード（Starter level）から入っています。タブレットの読み上げ機能に対応しており、テキストの音声を聴くことが可能です。

■地球の歩き方シリーズ

海外旅行ガイドブックの定番です。全エリアのタイトルを揃えています。今のところ台湾・東南アジア・北米が人気のようです。夏休みの旅行を予定されている方の準備にはもちろん、行き先を決めるために気軽に色々見比べるのにも便利です。

大型のレファレンスブックを別にして、一般図書の電子書籍の購入は、当館では初めての試みとなります。今後、利用の様子をみてタイトルを増やしていきたいと思っていますので、みなさんのご利用をお待ちしています。

* 1 印刷・保存できる範囲は1タイトル60ページまでです。利用は著作権法の範囲内に限られます。

* 2 リモートアクセスの方法はこちらにも詳細があります。

http://www.kobe-cufs.ac.jp/library/mel_remoteaccess.

はしもと まり（図書館職員）



今年も選書ツアーを開催します



図書館にある本は、教員や図書館の職員が選んでいます。本を選ぶことをそのまま“選書”と言いますが、図書館では年に一度、学生の皆さんに選書してもらう機会を設けています。それが選書ツアーです。広い書店で決められた予算の分だけ自由に本を選んでもらいます。さらに、選書された本は図書館に“選書コーナー”を設け展示をします。

学習に必要な本、興味がある分野の本、話題の本…あなたならどんな本を選びますか？あなたにとって必要な本は皆にとっても必要な本かもしれません。ぜひ皆さんのご参加をお待ちしております。

開催日時が決まり次第、図書館にポスターやチラシを設置します。お時間があるときに図書館にお立ち寄りください。なお、応募多数の場合は抽選とさせていただきますのでご了承ください。



図書館日誌 2017年12月～2018年6月



2017年		4.9-4.27	2018年度第1回 Re ユース
12.4-1.31	展示「司書のおすすめD」第39回	4.18	JLP オリエンテーション
12.6	選書ツアー茶話会		4月のゼミガイダンス 13回実施
	12月のゼミガイダンス 1回実施		5月のゼミガイダンス 14回実施
2018年		6.4-7.28	展示「司書のおすすめD」第41回
1.22-2.9	2017年度第3回 Re ユース	6.5-6.6	トライやるウィーク (1校2名受入)
3.22-3.30	蔵書点検	6.12	LA トークイベント
4.5	学部オリエンテーション		「如何にして効率的に中国語を習得するか」
	大学院オリエンテーション	6.21	LA トークイベント
4.7	英語教育学オリエンテーション		「がいこくご漬けのスヌメ 一目指せ！国産 バイリンガルー」
4.7-4.11	初年次教育 学科ごとに実施 (水曜日1回、土曜日5回)		6月のゼミガイダンス 4回実施
4.9-5.26	展示「司書のおすすめD」第40回		

AD ALTIORA SEMPER 神戸市外国語大学学術情報センターだより

第48号 ISSN 0919-2336

「AD ALTIORA SEMPER」とはラテン語で「常により高きを求めて」という意味です

編集・発行：神戸市外国語大学学術情報センター

〒651-2187 神戸市西区学園東町9丁目1

TEL：078-794-8151 / FAX：078-797-2257

URL：http://www.kobe-cufs.ac.jp/library/

2018年6月30日発行 発行責任者：センター長 岡本崇男